

2021年4月入職

くさはらあやか
草原彩夏

ゼネラリストではなく、スペシャリストでありたい

透析のスペシャリストとして進んでいきたい

この仕事を選んだきっかけは、父の職業が影響しています。重機の修理・メンテナンスに関わっている父の生き生きと働いている姿は、幼いころから私の中で強く印象に残っていました。家でも車や原付をいじることがたまにあって、楽しそうに機械に触れていた姿を覚えています。小学生くらいまで病院に行くことがよくあったので、機械操作と医療の両面を備えた臨床工学技士の道を志したのは、私にとって必然だったかもしれません。

私は中途入社で善仁会グループに入職していて、前職の他法人の病院では今よりも幅広く業務を担当していました。透析業務に携わりながら、病棟をまわったり、心臓カテーテル検査に関わったり、外来で来院された方の対応をしたりと、その仕事にはやりがいを感じていました。しかし、私は自分自身をゼネラリストではなく、スペシャリストとしてひとつの道を追求するタイプだと分析して、患者さまと長く歩んでいく透析業務こそが進むべき道だと思い、その領域において実績豊富な善仁会グループへの転職を決めました。

個性にあふれた思いやりエキスパートに



異動やリリーフでの勤務など、善仁会グループ内で複数のクリニックに足を運ぶ中、思いやりエキスパートの先輩方とともに働く機会が多くありました。言葉遣いや所作が美しく、まわりが話しかけやすいという点は共通していたのですが、タイプはそれぞれに違ったのが印象的です。いい意味で型にはまっておらず、自分の個性を大切にしているからこそ思いやりエキスパートとして活躍できるのだと感じていました。

候補に選ばれたときは自分にはまだ縁遠いと思っていたのですが、研修を終えた今は、このチャンスを掴めて良かったと思っています。今後役に立つ知識が多く、学びがある研修でした。男性と女性でパーソナルスペースが違うこと、自分と相手の中間点を見出すアサーティブ・コミュニケーションという考え方があること。こういった新しい学びは、早速業務で実践しています。先輩たちのように、自分の個性を出しながら、継続的にレベルを上げていくことが、私の今後の目標です。患者さまは私たちの細かい変化に気づいてくださることも多いので、これから声をかけていただくことも増えるかと思います。そんな患者さまとのコミュニケーションもモチベーションのひとつになっています。



笑顔あふれる「心配りが」
できる臨床工学技士を
目指します
草原彩夏